

魅力を紐解いていく伝道者に ことばを超えて通じる世界



宮城 茂雄氏

琉球舞踊家・組踊立方
宮城流 師範

1982年沖縄県那覇市生まれ。幼少より宮城流二代目家元 宮城能造に組踊・琉球舞踊を師事。琉球新報社主催 琉球古典芸能コンクール「最高賞」、沖縄タイムス芸術選奨「奨励賞」受賞。平成18年4月より1年間 琉球芸能に関わりの深い芸能研修のため 京都に留学。観世流シテ方・味方健氏に仕舞・謡、榎茂都流師範・榎茂都梅衣華氏に地唄舞を学ぶ。平成18年3月「第一回宮城茂雄舞踊の会」を国立劇場おきなわ大劇場、平成29年1月第二回独演会「宮城茂雄の会」をセルリアンタワー能楽堂にて開催。国立劇場おきなわ、国立劇場、国立能楽堂、国立文楽劇場主催公演等に出演。アメリカ・中国・フランス・イタリア・ドイツ・UAEなど海外公演多数。地元沖縄での公演活動、指導、普及活動に加えて、東京や京都など県外での琉球芸能の普及に努めている。沖縄国際大学日本文化学科 非常勤講師。沖縄女子短期大学児童教育学科 非常勤講師。川崎沖縄芸能研究会組踊研修部 指導者。

ミルク(弥勒)神をお祀りし
古典芸能と民族的な島の信仰と音楽が融合する家に生まれ
物心つく前から三線の音楽に自然と踊りだしていた
ルーツは石垣島の神事を司るノロの流れ
祖父母に育てられた環境で古い琉球言葉は身体の中に

リレー
対談

琉球舞踊への熱い想い 外国での評価は

琉球国崩壊後は首里城の庭で披露する組踊もなく
公務として舞を舞い歌を歌った士族文化の存在意義も消えた
独特の琉歌は8886の偶数調
琉球の言葉を素晴らしい現代の言葉で紡ぎながら
これから出逢うであろう恋心を7つの舞いでどう伝えていくか…



河瀬 直美氏

映画作家

奈良を拠点に映画を創り続け、一貫したリアリティの追求による作品は、カンヌ映画祭をはじめ国内外で高い評価を受ける。代表作は「萌の朱雀」「殞の森」「2つ目の窓」「あん」「光」など。映画監督の他、CM演出、エッセイ執筆などジャンルにこだわらず表現活動を続け、故郷奈良において「なら国際映画祭」をオーガナイズしながら次世代の育成にも力を入れている。

最新作『朝が来る』は第73回カンヌ映画祭公式セレクション、第93回アカデミー賞国際長編映画賞候補、日本代表として選出。第44回日本アカデミー賞7部門で優秀賞を受賞。東京2020オリンピック公式映画監督、2025年大阪・関西万博のテーマ事業プロデューサー兼シニアアドバイザー、バスケットボール女子日本リーグの会長も務める。プライベートでは野菜やお米も作る一児の母。

琉球国から続く歌舞を 現代、そして未来へつなぐ

河瀬 私からのバトンは、琉球舞踊家の宮城茂雄さんに受けて頂くことにしました。どうぞ宜しくお願いします。

宮城 こちらこそ宜しく願います。

河瀬 宮城さんとはまだ出会って半年程ですが、幼い頃から知っている様な不思議な感覚で……。

宮城 初めてお会いしたのが今年の5月で、ありがたいことに、それから非常に濃密なお付き合いをさせて頂いています。

河瀬 コロナ禍で初めての緊急事態宣言が発令され、日本全国の人々がステイホームで過ごしていた昨年の4月頃、パリのユネスコ本部から「レジリアート」と題したオンライン討論会の連絡がありました。「レジリアート」とは「しなやかさ」という意味の英単語「レジリエンス」と「アート」を融合させた言葉です。「こういう時代において、芸術家はしなやかであらねばならない」というこ



宮城茂雄氏

とで、ユネスコの事務局長のオードレ・アズレさんから「各国の芸術家の方々がオンラインで集まって、この時代に何をすればいいのか」というダイバートをしてもらいたい。その日本の取りまとめをやってもらえないか」とのことでした。

宮城 現在の事務局長は女性ですね。

河瀬 ええ、そこでどういう方にお声かけしようかと考え、海外で活躍されている日本人で、拠点も海外に移されているオランダ・アムステルダム在住のピアニスト・向井山朋子さん、兵庫県豊岡市に移住された劇作家の平田オリザさん等をお呼び

しました。朋子さんはオランダの文化政策について『KUNSTEN(クンステン) 92』という機関のことを発表されました。この機関は国のものではなく、外部から生きた声を届けることのできるものです。この機関の運営費は、民間を中心に個人会員もいますし、ゴッホ美術館なども会員として存在している。だからこ

そ国への提言も自由です。日本では文化庁が主体ですが、国の機関ではなく文部科学省の下、「省」ではなく「庁」であるがゆえに、あまり力を持っていないと言われているので、オランダのような機関が「日本にもあったらいいなあ」と思いまし

た。

宮城 あの頃は本当に皆さん大変でしたよね。

河瀬 ライブハウス、舞台芸術の人、古典も新しいミュージカルも、映画も美術館も大変でした。様々な分野の人達がそれぞれ政府に働きかけていましたが、もつたいないことに横串を刺していなかったのです。そこで様々な分野の方にお集まりいただき、ミーティングをすることになりました。その時に、古典芸能からは能楽の小鼓方で人間国宝の大倉源次郎氏が出てこられて、大倉さんからのお声で参加されたのが宮城さんでした。

宮城 オンライン上の20人ぐらいの中の一ひとり、でした。

河瀬 偶然、オンライン討論会の翌日にオンラインの仕事で沖縄に行くことを話したら「沖縄に行くなら、宮城さんに会うように」と、それがきっかけです。

宮城 あの時本当にビックリしました。こんな有名な方が沖縄に来られると思うのでご挨拶をさせて頂いたと思つたら、7月に、突然「明日沖縄に行くのでお時間ありません

か？」とご連絡があつて。オリンピックの取材で来られるというので、「少しはお手伝いができるかなあ」と思いつきながら一緒にさせて頂きました。

河瀬 オリンピックで金メダルを取った空手の喜友名諒氏の取材でした。もちろんその時はメダルを取れるかどうか分からない中で、全媒体アをブロックしていたので、懸命に説得をして監督の佐久本嗣男氏がOKして下さったのがギリギリ取材前日の夜10時頃でした。「明日の朝一のチケットを取って行きま

宮城 あれからまだ2か月ちょっとしか経っていないなんて、ジャンルも全く違うのに、何故か通じ合うものがありまして、その後何度となくお電話させて頂いたりして……。

河瀬 それなのに、実は宮城さんの「組踊」を観たのは昨日の紀尾井ホールでの公演が初めてなのです。9月に行われた『なら国際映画祭』の一環として、春日大社さんへ

琉球舞踊の演舞を奉納して頂きましたが、それも思いつきのような形でお願ひしたので実際に自分の目で見たのは春日さんの舞台が初めてでした。

宮城 決まったのもギリギリでしたね。

河瀬 1か月ぐらい前です(笑)

宮城 別件で予定が入っていたのですが、このご時世で流動的で延期になったりで、日程的には大丈夫でしたが、「果たして奈良の春日様で琉球の踊りを奉納させて頂いてもいいのか」という不安はありましたね。河瀬さんに私の踊りをまだ見て頂いていないし、奉納の時にガツカリさ

れたらどうしよう?という単純な心配もありました。それからは何度も何度も電話で演目のこと、どういった流れで舞台はどう設えるのか、等々毎日の様に夜中までお話しさせて頂きました。

河瀬 宮城さんのルーツはもちろん

沖繩ですが、おばあ様が石垣島で「神事」をされていて、ノロの流れだと思えますが、私の高祖母も奄美の方でユタをしていたので繋がりがあるのかな」と感じました。古来より日本人は自然と人間の関係性が非常に濃密で、人間が言語で語ることに以上に感覚を大切に、自然と共に生きてきた民族だと思います。見えな

いものを感じたり、人間同士なら相手の心模様を感じ取る民族なのかなと思つています。宮城さんは、多分にそういう感覚を持つておられて、すごく珍しいのはおばあ様達に育てられたということで、琉球言葉を話せるのですよね。

宮城 最近の若い人は、もう殆ど話せないですね。琉球舞踊や組踊というものは琉球の古い時代の言葉で、現在ではもう話されていない、いわゆる日本の古語の様なものです。そういう環境で育ってきたので、琉球の言葉は自然と私の中に入りまして、お話しをしていると、リズム感が違うと感ぜられる様でしたね。琉球舞踊は琉歌という沖繩独特の歌を使います。日本の和歌は57577、俳句は575で奇数調ですが、琉歌は8886という音数の偶数調になるのが大きな特徴で、その歌を繋げて物語にする様な韻文の世界のリズムが私の現代語にも入っている様で、河瀬さんは「何かリズムが違う」とおっしゃっています。

河瀬 8月に春日さんでの奉納舞踊をお願いしてから9月の本番までの



河瀬直美氏

間に、演目を何にするか、その内容をどう深めていくか、いろいろ話したのですが、たまにとても強く否定されている様な気がして、「茂雄さんの言葉が、すごくきつく感じる」とがある」と言ったのが最初です。

宮城 私は普通に話しているつもりでしたが……。言葉の言い回し等、同じ単語でもニュアンスが違ったのでしょね。

河瀬 演目を決めて、その琉歌にはこんな意味がある、と説明を受けたのですが、もう少しかみ砕いて説明してほしいとお願いしたら、万葉集にでもある様な直訳の現代語訳を送ってくれて。意味は解っても感情が入ってこないし、イメージが全然伝わらないから私に翻訳させてくれないかなあ」と言ったら、「翻訳はなくていいです！」と(笑)

宮城 私は大学で講義を持っていて、琉球の言葉だけでなく、もちろん現代語訳してお伝えするのですが、どうしても現代語の持っている語感と、琉球語の古代の音の響きという様なものは「やはり違う」と絶えず思っていて、そこをどうしたらいいのかという葛藤があります。大

学など研究の用語では琉球語と言いますが、「鳥くとうば」と言ったり「ウチナーグチ」とも言っていて、その整理もまだできていません。沖縄は面積としては狭いですが、海を隔てて非常に広いエリアに点在しています。それぞれの地域の訛りがあるの

で言葉も違います。又、沖縄では「村」を「シマ」とも言います。つまり自分の住んでいる地域が「シマ」、隣の集落も「シマ」です。私の演じている組踊は王都の芸能なので、士族の言葉、かつ、話しことばではなく

文語に近い「歌ことば」なのです。日本の万葉の時代、奈良時代の古語が多く残っていて、要するに「言葉のガラバゴス」と言えるかもしれませぬ。例えば、万葉集にある「刀自」という言葉は、自分の妻を指し

ますが、沖縄では「トウジ」という形で残っていますし、トンボを「秋津」と言った様ですが、沖縄では「アケジュ」と言います。この様に、単語ひとつをとっても、この広い言語体系の中で非常に意味深いものがあるし、踊りにも残っています。私は

琉球語がしみ込んでいる方なので、「原文の音だけでも十分だしそれを

感じてほしい」という思いがあります。そこで、一般の多くの方にお知らせするのに、素晴らしい「自由訳」という考え方を直美さんから提案して頂きました。

河瀬 「翻訳」と言うのと「これは翻訳出来ません」という返事なので「では、自由訳では？」と、その言葉にビビッときてくれた様でしたね(笑)

宮城 ここ何十年もずっと自分を締めつけていたタガがパッと外れて、「ああ、そうか!」と。「言葉の達人の河瀬監督に言葉を紡いで頂いたら、きつといいものができるだろう」と、その後5、6時間ぐらい電話で話しましたよね。

河瀬 気がついたら夜中の3時、もちろん気怠い眠さはありませんが、まだ誰も開いてない扉を一緒に開いて宝物を探している感じで、これを言葉に置き換えていきながら、ワクワクしていました。実際、春日さんでは3つの歌を奉納して頂きました。最初に疫病退散の歌、次は五穀豊穡の歌、最後に「諸屯」という

歌。奄美諸島の加計呂麻島にある「諸鈍」という所には、お面を被って踊

る「諸鈍シバヤ」という民族的な芸能が残っています。その諸鈍とほぼ同じ発音で琉球に伝わっている踊りと歌は、諸屯を離れてしまった恐しい人を想う歌で、それは私の中でもとても分かりやすく自由訳ができたのです。「疫病退散」の歌は、「風の

声も止まれ、波の音も止まれ、静かなる御代を願う」という様な琉球言葉ですが、相手を想う気持ちと同じ様に翻訳していたら「それは絶対に違う」と言われました。

宮城 私の中でもすごい学びで、どうしても受け付けず、身体が拒否する感じでした。琉球言葉だと「ナミヌクイン トウマリ、カジヌクイン トウマリ、シジカナルミヌ、ウニゲシャピラ」で、8886のリズム

になっているのです。**河瀬** 「波の声よ止まれ、風の声よ止まれ、静かなる御代の、お願いをします」を「止まって下さいね」とすると「違う」と言われて「コロナ退散の琉歌だから神様に、ねえは言わないよね」という発見がありました。

宮城 沖縄の琉歌は「短詩形の抒情詩」と言われています。今回の奉納

に当たっては、神様に捧げる祝詞の様な側面があるということに気づきました。諸屯という愛しい人を想う歌は女踊りという形式で、琉球の時代も男性が女性の扮装をして踊るスタイルですが、直美さんの非常に情熱的な言葉で紡いだ世界がよくマッチして、直訳より自由訳の方がはるかにピッタリくる、と感動しました。

河瀬 茂雄様に「認めて頂いた！」という感じでした(笑)

宮城 一方でこの儀式的に捧げる歌の訳がフレンドリーになってしまうと、「恐れ多くてそんなフレンドリーには歌えない」という思いがあつて、他ジャンルの方とのコラボで自分の足元が見えると痛感しました。

河瀬 組踊も含めて見させて頂いた時に、琉球の方達の常識は本土の人間には「それ自体」言葉の中にある感覚も含めて、なかなか理解出来ないと感じました。でも、少し深く追求していくと同じ感覚に行き当たるのです。組踊は玉城朝薫という方が、300年程前に独自の形を創ったと言われていますが、日本の芸能が古来より南は石垣まで伝わったと言われ、源流は元々大和の芸能

であつたルーツを内包した「琉球からの贈り物」によって、現在でもある種分断してしまっている文化が「実は同じだった」という所に行き当たり、それを春日さんに奉納させて頂くのだと。地球上で起こっている全ての「分断」は、対話の不足だと思えます。粘り強く語り合つて、ああいう形でひとつ出せたのはいい贈り物でした。本当に。

宮城 当日、直美さんが自由訳を吉野の手書き和紙に書いて下さつて、ご来賓の方々やユースの映画祭に参加された若い方々にお配り頂きました。これも又、素敵なお贈り物になったと思えます。

踊り好きな子どもが組踊の伝承者になるまで

河瀬 茂雄さんは、幼少の頃どんなお子さんでしたか？

宮城 2、3歳の頃から、今とほぼ変わらない様なことをやっていますね。琉球の歴史、音楽の歴史を辿ると有名なのが三線で、三線は中国から三弦という楽器が琉球に入つて琉球から堺港に入つて、今の三味線



その神様を代々お祀りする家なのです。代々その家の女性が神に仕える、沖繩ではノロ、石垣島では神司と言いますが、そういうお役目をやる家柄でした。祖母の弟や、ひいおじさんに当たる方が、三線の名手で、沖

になつたというのが学術的な説です。南方から上がつていったのが三線、一方、琉球箏は薩摩藩から日本の箏の奏法が入つてきたと言われてます。例えば『六段の調べ』という曲がありますが、その曲とほぼ同じ『六段菅攪』とう曲が琉球にも伝承されていたり、こちらにはない七段というのがあつたり。『船頭節』や『源氏節』等日本の古語で歌つている箏の曲が沖繩だけに伝わって、残っているものもあります。そんなアジアを広く捉えた音楽が、この琉球沖繩に存在します。古典芸能の琉球箏を父方の祖母がやっていたという環境、母方は今は観光で有名な石垣島という八重山諸島の出身で、「ミルク神」という弥勒信仰のひとつで、

繩の古典芸能と民族的な島の信仰と音楽が融合する様な家に生まれ育つたのが、私の幼少時代です。両親が共働きでしたので、じいちゃん、ばあちゃん子みたいな感じで、家の内でお祭りやお祈りがあつたりする環境でした。子ども達に人気のキャラクターより三線の音楽に自然と反応して踊り出す子どもでしたので「正式に入門させた方がいい」ということで入門しました。物心つく前から踊っていて、何故かやめられない止まらない、それだけです。私が楽しそうに踊って祖父母がそれを見て喜ぶ、そういう毎日でしたね。

河瀬 それで学生時代は学校に馴染まない子でしたか？

宮城 そうでもないのですが、良い

表現をすれば小学校でも一目置かれていて「茂雄は踊りだから」という感じで、ひと通り学校も行きました。が、学校が終わるのを待ってお稽古に行くのが大きな目的でした。

公務として宮廷の内務として舞を舞い、歌を歌う。実務だけではなく歌舞音曲ができることが、琉球の士族のステータスだったのです。歌を詠み書をたしなむなど様々な文化的教養が必須で、そのひとつとして踊りがあったということです。明治12年に廢藩置県で琉球から沖縄県になるまでそれが続くのです。

宮城 友達と遊んだりするのも楽しかったですが、頭の中は踊りがメインで、中学の頃からは本格的にお稽古に打ち込む様になりました。自分の師匠のお稽古だけではなく、師匠方の集まりに研修の様形で修行することができたので、学校の授業が終わるとすぐにお稽古場のお掃除やお茶くみをする毎日でした。

河瀬 それが琉球の歴史ですね。
宮城 明治12年に沖縄県になって琉球が崩壊すると、それまで首里城内で国王を中心に国の運営として踊っていた士族文化の披露の場がなくなり、存在そのものの意義も消えてしまいます。でも沖縄の風土というか、芸能を愛する気持が明治以降、大正、昭和と沖縄の商業演劇の中でずっと育まれ、昭和の戦争で一旦リセットする形になりました。戦前に芸能をされていた方々が流派を立ち上げ、現在に至っているのは、プロとして芸能をやっているのは、まだ歴史が浅いのです。

能の中に残り続けているのですね……。
宮城 本当に不思議に思います。この組踊という芸能は実は国王の即位式、つまり何十年に一度ある「代替わり」の時に演じられていたものです。琉球の時代は、歴代中国王朝の「冊封体制」という外交の中で琉球の国王が認められるということが重要でした。国王の即位式には中国皇帝の使者がやってきて、「あなたを琉球国王として認めます」という式典があって、全世界、その他のアジア各国に広まっていくのですが、その時首里城の庭で歓待の芸能を披露するので、そのメインが組踊です。琉球国というものはもうないけれど、沖縄のアイデンティティの様な形で現在も継承されて演じられているのです。

感じる」とおっしゃったことを思い出しました。でも、「違い」を感じて孤独な感覚を持ったたり、琉球舞踊に沢山流派があることで、目指すべき未来や価値観、方向性も異なっていて歴史も浅く、一般の舞踊として人様に見せるものになっても、人々が認め始めるにはまだ時間がかかる。これが正しいというのが、ある意味まだ確立できていない中のご自身の立ち位置にも葛藤がおりだと思えます。現時点で、沖縄の組踊をはじめ伝統芸能の踊りに対する一般的な考え方や見方はどのような感じですか？

河瀬 現在は宮城流の師範ですが、この先は家元になられるのですか？
宮城 私の師匠は宮城流の二代目家元で、師匠からのご指名があればなるのかな……。(笑) 琉球芸能の歴史的な流れは、他の芸能と異なっていて、お能ですと観阿弥さん、世阿弥さんがおられて、将軍家にお仕えしながらその専門家として生きていかれるわけですが、琉球の時代は国を挙げての芸能で、琉球の士族、いわゆる貴族的な側面があって、自らの

表現者は記録媒体
記憶や体験を伝道する

河瀬 昨日、踊りを拝見した時感じたことですが、私と何か話がヒートアップしていた時に「自分はやはり、日本人ではない」という風に

宮城 様々なご意見もあると思います。実は、本土復帰の時に組踊が文化財指定を受けているので来年で50年になります。琉球舞踊は組踊の表現の基礎となるもので、数年前に重要無形文化財の指定を受けました。基本にお能や歌舞伎や狂言等と同様の文化財の立ち位置にあります。そういうこともあって、国立劇場がオープンしたのです。国立劇場があるのは東京と大阪と沖縄の3都府県だけで、沖縄でもかなり広まってきた感がありますね。組踊は1719

年が初演なので、2019年に300年という節目を迎え、普及活動をやっているという状況です。

河瀬 昨日の組踊を拝見して、お能や狂言、歌舞伎と比べるとやはり周知度が低く、会場にいられている人はまだまだまだ身内という感じがしました。東京で公演をされても、一般には広がっていないな、琉球舞踊の魅力はどう伝えていけばいいのかと考えていました。まだ答えは出ませんが何かアイデアはありますか？

宮城 コロナ禍になって周知活動がほぼ停止状態になっています。実は昨日の舞台も、本来、昨年上演予定のものでした。沖繩というところ、やはり賑やかな踊りを想像される方が多いかと思えます。よく知られる太鼓演舞の「エイサー」は盆踊りがルーツの民俗芸能です。民俗芸能やその影響を受けた新しい芸能も盛んに演じられていて、そこにクラシクな芸術文化を新たに構築していくこと、我々演者だけではなく、様々な形での取り組みや枠組み等も必要かなと思っています。印象的なのは、言葉も伝わらない全く違う音楽性でありながら、海外で上演した時に、

すごいビビッとくる感想を頂いたりするので。フランス公演も昨日と同じ演目で、親の仇を討ちに行く少年が母親との別れの儀式の場面、そこではゆつたりした音楽が流れ、演じ手はひたすらゆつたりした動きで悲しみを表現していきます。地元沖繩では「もつと動いて悲しみを表現してほしい」というご意見や感想を頂くことがあります。この動きの速い現代社会では、これだけゆつたり過ぎると……とも思われますが、フランスの方からは逆に「子どもを送り出す母親の気持ちが伝わって苦しくなる程だった」とか「その場面が良かった」という感想が多く、絶えずいろいろな形で芸術に触れておられる方には、言葉を超えて通じる世界があるのかなあと思ったりしました。

河瀬 感じ取れる方ばかりではありませんが、今は一般の方でも、歌舞伎やお能に興味を持たれる方が増えていますから、知っていただく活動や興味を持ってもらえる様なアピールは必要ですよ。そういう観点から今、何か取り組みまれていることはありますか？

宮城 地道な活動ですが、全国の小

学校・中学校を回って実際に踊りを体験してもらったりしています。今回は「なら国際映画祭」で河瀬さんとの素晴らしいコラボによって、自由訳で琉球の舞踊を味わうという新しいエッセンスを頂きました。それを組踊バージョンに更に広げられたら、より素晴らしいものになっていくのではないかと期待しています。

河瀬 「組」とつけたのは、映画というものが、元々ひとコマひとコマの画が組み合わさってひとつの「想い」になるという考え方からです。人の想いにはストーリーがあつて、物語があつて、物事を語る時にはその一枚の画だけを見て感じる人は少なく、その背景にあるストーリーを伝えることが大切です。組踊もおそらくそうだろうと思います。

300年前に開祖された玉城朝薫という人の想いは、様々な地で伝承され、琉球の記憶や体験を伝道し、それを表現し、ストーリーとして語ってきたのでしょう。私達の様な表現者は動く記録媒体で、私は映画で、茂雄さんは琉球舞踊の中から、何か



を次に渡してゆく伝道者なのかなと思っています。先日のなら国際映画祭の春日大社様での奉納には様々な制限もありだったのでないかと思いますが、しっかりと引き受けて来て頂き感謝しています。映画は新しい文化でまだ100年の歴史しかありませんが、私はインディペンデントな映画監督なので、その自由さと引き換えの孤独をも自分の中に内包しながら表現活動をしてゆく覚悟です。日本よりも先にフランスが評価してくれて、逆輸入の様な形になりましたが、それ以後も東京ではありません。奈良からどこにでも行ける自分でありたいのです。茂雄さんも同じ様な想いで沖繩を離れないのでしょうか？

宮城 そうだと思います。沖繩から絶えず外を意識しながら、自分を見つめるというか……。

対話をしながら見出だした
細部の美と全体の美

河瀬 奈良に来て頂いた時に大変な
思いはされませんでしたか？

宮城 いえいえ。大変な思いは何も
しませんでした。

河瀬 師匠もいらっしやるし、同輩
の皆さんもいらっしやるし、もしか
したら「どうして宮城茂雄だけな
の？」と思われるかな、と気は遣っ
たのですが……（笑）

宮城 ありがとうございます。その
辺は大丈夫です（笑）。それにも増
して素晴らしい機会を頂き、こうし
てコラボレーションをさせて頂いて
いることに感謝しています。バレエ
の方と踊ったり、ピアノ演奏で踊る
ことも挑戦していますが、それとは
違うコラボレーションで、しかも河
瀬監督にカメラ撮影もして頂きまし
た。

河瀬 4台のカメラでね。

宮城 そのカメラワークを通して、
「この諸鈍の女の想いを表現する」
という熱い想いとこだわりを見せて
頂いて、自分にも又こだわりが出て



対談を終えて

う一回、ディスカッ
ションをさせて頂い
た。なんてね。それ
で映像を見ていたら
房指輪をしていらっ
しゃって。

宮城 琉球の時代か
ら指輪の文化があり
まして、踊りの時に
もするのです。

きてしまつて（笑）前日、ありが
たいことに、全く同じような様式で
カメラハをさせて頂いたのですが、
朝から台風の影響で大雨。でもその
予定時間の30分だけは晴れて、「天
の神様をも味方につけておられる監
督」と皆で歓喜しましたね。そし
て夜中までディスカッションして
……。

河瀬 化粧でお衣装が汚れたりその
修正に時間を取られたり、前日に衣
装を着て化粧するのは美はすごい
リスクなのです。おひとりであら
れているので、諸々のサポートをし
て下さるお弟子さんにも感謝し、そ
ういう意味で物理的な負担もありま
す。一度舞っただけでもすごく疲れ
ていらっしやるのに、その後にも

河瀬 奈良に来る前に又吉さんとい
う90歳になるおじいちゃんに磨い
てもらいに行く聞いていたので、リ
ハースルの時には指輪に寄ったり、
お袖を持たれる時の感じだった
り、着物もね、ゆつたりと羽織つて
いるだけですよね。

宮城 打掛ですね。大奥でサーっと
歩くイメージです。

河瀬 すると足は出ていないのに、
着物の裾から赤い足袋がシュッと出
てきて、あまりにも美しくどうし
てもクローズアップで撮りたいと
思ったのですが、「こんなに寄られ
ると自分が踊っている動きが見えな
い」と強く言われました。「この動
きがこうなつた後に、こういう風に
腰の動きがあるから流れる様に見え

るもの、手のこの関節が滑らかに動
く」とか。茂雄さんがやるとその滑
らかな動きが腰にまで……踊つた時
に。

宮城 関節を柔らかく使っているの
です。

河瀬 そう言われると、「これが上
がる時は寄りだけではなくミドル
ショットも使わなきゃ」とか、細か
い指示が夜の11時頃から又始まつて
（笑）

宮城 翌日が本番ですけど（笑）
河瀬 そういふことの末に本番を迎
えて、見ていると止まっているだけ
のものすごく削ぎ落とされた舞の中
で、実は目は動いていて……

宮城 どういうのでしょうか。夢から
覚めた喪失感というか、愛しい人と
枕を並べていて、夢から覚めて「あ
あ、やはり夢だったのね」とボート
としていた様な感じを自由訳とし
て、素晴らしい言葉で紡いで頂いた
のです。そういう面をね、顔のこと
を琉球では面といいます。これはお
能の直面ひためんから来ていると思いま
すが、内からじみ出てくる静かな感
情というものを表していくのです。
河瀬 目だけでやるのですね。

宮城 ええ、体は動かさずにゆっくりと目とアゴを使って右から左へ……と。

河瀬 ネットで見れるものはしっかりと見て、いろいろと調整をしたりディスプレイオンしているうちに、自分でも踊れるぐらい覚ええましたよ。

宮城 カメラマンの方も動きを全部頭に入れて撮って下さいました。準備の所作とメインの所作とおさめの所作の様なものがあって、例えば最後の、もう別れた後、袖をつかまえて、「お香の匂いや私のいろいろな香りを袖に託して、どうぞ持って行って」と、その両袖を取って振り返るところがあるのです。「そこが命だから、ここだけはもう絶対に！」みたいなね。

河瀬 そんな風に対話をしながら映像を創れたのは素晴らしいことです。茂雄さんと似ていると思うのは、納得がいくまで途中で物事を終えないということですね。でも、訣別寸前までいったりもしましたが(笑)

宮城 共感しているから訣別には至らない、芸術を愛する監督の芸術観というものを尊敬しています。

河瀬 茂雄さんのこと、もういいかな……と思っていた時、銀座シックスの観世能楽堂での『関寺小町』というお能を一緒に観に行く約束があった。

宮城 演目の中でもめつたにやらない秘曲中の秘曲ですね。

河瀬 席は離れていて、観終わったら後すぐ話がしたくて、お互いに話をしたら思っていることが同じだったのです。私は観ながら育ててもらった養母のことを思って泣いていて、彼はおばあちゃんのことを思い出していたと、何だか違う次元のものに繋がっている様なご縁を感じました。

宮城 本当に芯の所で同じだったのかもかもしれません。直美さんに描いて頂いた自由訳の書、いざ、となった時に「筆が動かない」とおっしゃるので、急いで録音してデータをお送りして聴いて頂き、描いて頂きました。字も躍っている様で素晴らしい。これを私が読むと歌に聴こえてきて、身体に歌が沁み込んでそのまま筆に乗せられたのだなあ、と強く感じました。

河瀬 私、書道を習ったこともない

ので、歌を聴いて、それしか描けなかったのです。

宮城 これも夜中ですけど(笑)でも、歌と一緒に降りてきて描いただけというのは、河瀬さんもユタの様な素質があるのでしょうか。

河瀬 そうかもしれませんね。もう二度とこの字は描けません。やっぱり感覚が降りてくる時があるのでしようね。だから私の映画撮影現場は、俳優も含めてほぼ一発OK、もう、2回は出来ないのです。

宮城 だからこそ価値があるので。それは我々の舞台と全く同じです。

河瀬 最後に、茂雄さんが描く未来像をうかがえますか？

宮城 このコロナ禍は自分の足元を見つめ直すいいきっかけになったと思っています。かつ、河瀬直美監督との出会いがあって素晴らしいコラボをさせて頂きました。周知活動は地道に積み重ねていきたいなと思いますし、その為には、やはり琉球の舞を披露するのが職分ですので、沖縄にしつかりと根差して、スポーツ選手が基礎トレーニングを毎日行う様に、よりいっそう技術や心を高め

ていきたいと思っています。

河瀬 具体的には何か考えていらっしやいますか？

宮城 「女踊り」というジャンルに關しては非常に叙情的な恋の歌や愛の歌が多く踊られています。代表的な踊りが7つあって、そのリサイタルをやりたいという夢があったのですが、それが見えてきました。そしてできるなら、監督にその自由訳を朗読していただいて、7つの踊りを踊ることを実現したいですね。

河瀬 今、発表しましたね(笑)

宮城 近い将来是非(笑) 本当にこれをやってみたいと思っています。何度も言っている様に、琉球の言葉はどう伝えるか、言葉がネットになることも多いのです。そこを現代の素晴らしい言葉で紡いで頂き、現代に生きていらつしやる人達の経験の中にある恋心や、これから出逢うであろう恋を想像し、共感して頂く、そういう空間ができたらいいなあと思っています。

河瀬 ぜひ実現させましょう。今日はどうもありがとうございました。

宮城 こちらこそありがとうございました。